図 4．個体番号 1 が産した変形した卵

体番号 8，24，32）は異なるメス 2 個体と 1 回ずつ，残り 1 個体（個体番号 12）はさらに異なるメスと 1 回交尾に至りました（**表 2**）．つまり，実験期間中，交尾に至った雌雄のうち，メスは 1 回ずつしか交尾を受け入れなかったのに対し，オスは複数回交尾に至ったことになります．交尾に至ったオスのうち，最小サイズの背甲長 9.2 ㎝の個体番号 8 は，実験中 2 回交尾をしたものの，2 回ともお見合い開始から交尾まで 80 分と長い時間を要していました．交尾に至らなかったオスのうち個体番号 33 は，前両足（右足は手首，左足は肘下が欠損）が欠損しているにもかかわらず，メスにアピールしていましたが，交尾には至らず，求愛行動に不利があったようです．

最後に

今回の交尾実験を行って，メスにおいては，子孫を残すための交尾を 1 度すれば，必要以上の交尾をしないことや，ニホンイシガメにも相性があり，オスがいくら求愛行動をしてもメスが受け入れなかったり，またメスが受入体勢になっていても，オスが消極的であったりとなかなか交尾まで至らない難しさがあることを感じました．

記録をまとめるにあたり，谷口真理さんにご協力いただきました．ありがとうございました．

江戸時代中期の摺物「勢州津塔世山四天王寺三尊肩載之霊亀」に描かれたニホンイシガメ

中村有加里・深瀬 徹

794-8555　愛媛県今治市いこいの丘 1-3　岡山理科大学獣医学部獣医学科

A Japanese pond turtle, *Mauremys japonica* drawn on a woodprint in the Edo period, Japan.

By Yukari NAKAMURA and Tohru FUKASE

Department of Veterinary Medicine, Faculty of Veterinary Medicine, Okayama University of Science, 1-3 Ikoi-no-oka, Imabari-shi, Ehime 794-8555, Japan

はじめに

浮世絵やその他の摺物（すりもの）の類にはしばしば動物が描かれている．それらは擬人化されたり，あるいは実際とは異なる形で描かれていることがしばしばあるが，その一方，正確な形態が反映されていることも多い．正確に描かれた動物の絵は，その種を推測することを可能にし，そのため，それが描かれた時代の動物の様子を知るための材

料にもなる．

このたび，われわれは，江戸時代に摺られたと考えられる１枚の木版画を入手し，そこに描かれていたカメの形態を調べ，種の特定を試みた．

研究の対象

「勢州津塔世山四天王寺三尊肩載之霊亀」〔「肩」の文字は「日本古典籍くずし字データセット」（情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設 人文学オープンデータ共同利用センター，2019）を参考にして判読〕および「享保十五庚戌歳二月十二日従蓮池出現」との記述とともにカメが描かれた摺物（**図 1**）を 2025 年 10 月に東京都内の古書店にて入手した．摺物とは，広義には印刷物一般を意味するが，通常は版木を用いて印刷したものをいう．とりわけ江戸時代に広く流通した浮世絵やその他の一枚摺の書画などを摺物と称している．

図 1．木版墨摺「勢州津塔世山四天王寺三尊肩載之霊亀」

このたび入手した摺物について，とくに描かれているカメの形態に関して検討し，その種の特定を試みるとともに，こうした摺物を作成した意図等を考察した．

摺物とそれに記載の文言と絵の様態

入手した摺物は木版墨摺で，和紙に摺られ，紙面の大きさは縦の左縁が 396 mm，右縁が 395mm，横は上縁，下縁ともに 287 mm であった．中央にカメの絵が描かれており，その右側には「勢州津塔世山四天王寺三尊肩載之霊亀」，左側には「享保十五庚戌歳二月十二日従蓮池出現」との記載があった．

描かれていたカメは背面から望んだ図で，紙面上の大きさとして，最大直甲長は 178 mm，直甲幅は 123 mm と測定された．その背甲板は，項甲板，椎甲板，肋甲板，縁甲板，臀甲板が明瞭に描かれており，項甲板は 1 枚，肋甲板は 4 枚，縁甲板は左右ともに 11 枚，臀甲板は 2 枚が認められたが，椎甲板は，背甲の中央部に 3 体の仏と思われる像が描かれていたため，第 1 椎甲板と最後の椎甲板が確認できるのみであった．体後半部の縁甲板と臀甲板は，遊離縁が鋸歯状になっていた．頭部と頸部，四肢はすべてが甲から出た状態で，実際のカメの形態を模したように描かれていた．また，尾も甲から出ており，基部が太く，途中から細くなっていた．

カメの背甲の中央部には上述のように三尊が描かれていた．ただし，この三尊は，中央の中尊と左右の脇侍ともに，簡略に表現されていた．なお，この 3 体ともに，頭部には螺髪（らほつ）（丸まった頭髪）と肉髻（にくけい）（頭頂部の隆起している部分）が認められた．

考察

この摺物は，「享保十五庚戌歳二月十二日従蓮池出現」との記載があることから，享保 15 年か，あるいはその後まもなくの時期に摺られたものと考えた．享保 15 年は西暦では 1730 年で，干支は庚戌（かのえいぬ）である．

ここに記載されている「勢州津」は伊勢の津で，現在の三重県津市にあたる．そこに所在する「塔世山四天王寺」は現在も存在する曹洞宗の寺院で，寺伝によれば飛鳥時代に聖徳太子により建立されたという（塔世山四天王寺, 2025）．

描かれているカメは，日本に分布する淡水棲の各種のカメ類を考えたとき，その形態からニホンイシガメ *Mauremys japonica* と思われる．この絵では背甲の隆条（キール）は明確ではないが，最後の椎甲板の頭尾方向に 1 本の線が描かれており，これが隆条を表しているとすれば，このカメの背甲の隆条は 1 本と考えられる．3 本の隆条を有するクサガメ *M. reevesii* と鑑別する点となろう．また，描かれたカメは背甲板の縁甲板と臀甲板の遊離縁が鋸歯状となっており，このこともこの絵がニホンイシガメを描いたものであることを示している．また，尾の基部が太くなっていることから，描かれているカメは雄であると推察される．なお，このカメがニホンイシガメの雄であるとすれば，描かれているカメの体サイズは，実際のニホンイシガメの雄の個体よりも大きいが，この摺物ではやや拡大して描いたのであろう．

このカメは「従蓮池出現」と書かれている．すなわち，塔世山四天王寺の蓮池から現れたとのことである．現在の四天王寺に池はないが，寺伝では永禄 8 年（1565 年）の頃には門前に蓮池があったといわれている（塔世山四天王寺, 2025）．享保 15 年（西暦 1730 年）の頃にも，境内ないしは門前に蓮が生育する池が存在し，その池にニホンイシガメが生息していたことが推察される．

カメの背甲には，蓮の花の上に三尊が描かれている．三尊は，仏教における仏像安置の様式の 1 つで，中央に中尊，その左右に脇侍が配置されているものである．中尊としては釈迦如来や阿弥陀如来，薬師如来などがあり，それらを中尊とする三尊をそれぞれ釈迦三尊，阿弥陀三尊，薬師三尊という．このたび入手した摺物では，中尊と左右の脇侍はいずれも簡略に表されており，これらの仏が何であるのか，たとえば中尊が釈迦如来であるか，阿弥陀如来であるか，薬師如来であるかなどは明らかではない．ただし，塔世山四天王寺が室町時代以降に曹洞宗となり，江戸時代にも曹洞宗であったこと（塔世山四天王寺, 2025）を考えると，中尊は釈迦如来の可能性があろう．脇侍に関しては様々なことが考えられるが，曹洞宗の釈迦三尊の掛け軸等では，左脇侍（向かって右の脇侍）は承陽大師（道元禅師），右脇侍（向かって左の脇侍）は常済大師（瑩山禅師）となっていることが多い．とはいえ，大師とすると，大師は通常は坐像として描かれるが，ここでは立像として描かれている点で違和感があり，加えて頭部に螺髪と肉髻が認められることも大師とは異なるように思われる．なお，カメが相当に正確に描かれているのに対して，仏の絵が簡略化されていることに関しては，何らかの意図があるのかもしれないが，その考察には至っていない．

ここで，カメの背甲に三尊が認められたという点に関して，実際のカメの背甲に何らかの模様や付着物があり，それを三尊に見立てたのか，あるいはまったくの虚構であるかは，判断できない．しかし，いずれにしても，カメは古来からめでたいもの，縁起を祝う道具として用いられるものとなっており（關根, 1912），それに仏の姿を組み合わせることによって霊験あらたかであることを

示したものと思われる．

江戸時代におけるカメ類の記録もいくつかが知られている．それらはニホンイシガメやクサガメと考えられるものであるが，その当時の出版物からの知見が主となっている（後藤，2015；2017；2019；2020a；2020b；2021；2022; 後藤他, 2023; 後藤・辻井, 2023；2025）．

古い時代に描かれた動物の絵は，その時代における動物の分布などの参考になるほか，人と動物の関係など，様々な観点から有用な資料になり，ここで得た摺物もその時代を表す貴重な資料であると考えた．

引用文献

後藤康人．2015. 1824(文政７)年に江戸市中で記録されたクサガメ．爬虫両棲類学会報 2015 (1): 18–20.

後藤康人. 2017. 栗本丹洲が記録した九州産クサガメ写生画. 爬虫両棲類学会報 2017 (2): 151–153.

後藤康人．2019. 文献資料にみる 19 世紀中葉の紀伊半島におけるクサガメ．爬虫両棲類学会報 2019 (2): 149–152.

後藤康人．2020a. 福山志料におけるクソカメの記述について．爬虫両棲類学会報 2020 (1): 26–27.

後藤康人. 2020b. 歴史資料でたどる江戸時代後期におけるクサガメの諸相. 亀楽(20): 4–6.

後藤康人．2021. 阿淡産志にみる 19 世紀の徳島藩領（阿波国・淡路国）の淡水生カメ類. 爬虫両棲類学会報 2021 (1): 31–35.

後藤康人. 2022. 江戸時代中期の長州藩領の淡水生カメ類および周防産物名寄のクソ亀について. 爬虫両棲類学会報 2022 (1): 16–19.

後藤康人・野田秀樹・加賀山翔一．2023. 庶物類纂にみる江戸時代前期から中期の日本産カメ類. 爬虫両棲類学会報 2023 (1): 62–66.

後藤康人・辻井聖武．2023. 江戸の町のどこにイシガメがいたのか．第 10 回淡水ガメ情報交換会講演要旨集 60–61.

後藤康人・辻井聖武. 2025. 続・江戸の町のどこにイシガメがいたのか －六義園で暮らした大名の日記から－. 御亀楽（4）: 11–13.

情報・システム研究機構 データサイエンス共同利用基盤施設 人文学オープンデータ共同利用センター. 2019 (2025 年 12 月 10 日閲覧). 日本古典籍くずし字データセット. https://codh.rois.ac.jp/char-shape/

關根正直. 1912. 縁起の話. 心理研究 1：233-248.

塔世山四天王寺. 2025 (2025 年 12 月 10 日閲覧). 歴史. 塔世山四天王寺. https://sitennoji.net/history/